

児童教育学科

学科長

戸 江 茂 博

DOE Shigehiro

第12回国際教育フォーラム2017

2017年7月17日（土）、第12回国際教育フォーラムが開催されました。親和学園創立130周年を記念しての「国際教育フォーラム」であり、本学の国際教育研究センターと児童教育学科の主催により、大学院文学研究科教育学専攻及び親和学園親和教育研究所の協力を得て行われました。本年の第12回フォーラムは、「レッジョ・エミリア・アプローチに学ぶ～子どもの主体的な学びを育むプロジェクト活動～」と題して、イタリアのレッジョ・エミリア市でレッジョ・エミリア教育を推進する代表的な教育家を招いてのパネル・ディスカッションとして実施しました。

パネル・ディスカッションに先立って、レッジョ・エミリア市の幼児教育委員であるパオラ・ストロツィ氏によって、「レッジョ・エミリア・アプローチ」の紹介が行われました。レッジョ・エミリア教育は、今や国際的に評価された幼児教育のあり方ですが、1963年に最初のレッジョ・エミリア市立幼児学校が開校し、レッジョ・エミリア教育が実施されるようになりました。社会的構築主義を理念として行われる教育システムであり、「学習とは、情報の蓄積ではなく、対話のプロセスであるということ。そのプロセスを通して子どもは様々な概念を組み立て、様々な表現方法を駆使しながら自分なりに世界を理解すること」を可能にするような教育実践であるということです。

「レッジョ・エミリア・アプローチ」の概要説明を受けて、パネル・ディスカッションの開催となりました。パネリストは、レッジョ・エミリア市の幼児教育委員であり、レッジョ・エミリアのベダゴジスタ（教育専門家）であるパオラ・ストロツィ氏、レッジョ・エミリア市の幼児教育委員会のアトリエリスタ（芸術専門家）を務めるマッ

シモ・ギラルディ氏、そして本学理事長であり名誉教授の山根耕平氏の各氏でした。コーディネーターは、本学児童教育学科准教授の猪田裕子が務めました。

まず最初に、パオラ・ストロツィ氏は、レッジョ・エミリア・アプローチの理念について語られました。社会的構築主義の考えから編み出された教育システムであること、子どもが学びの主人公であり、他者とのつながりの中で自分の学びを組み立てていくものであること、つながりの教育の中で他の同年代の子ども達や大人との交流をおして世界と出会い、創造性や自己表現力を育んでいくものであることを熱意をもって語るとともに、実例として一人の子どもが創造力を発揮して自己表現活動に熱心に取り組む姿を示してくれました。

次いで、アトリエリスタのマッシモ・ギラルディ氏が話題提供を行いました。ギラルディ氏は、芸術こそが学びの契機となるものだという確信の下に、芸術を様々な学習分野とリンクさせることを教育の中に持ち込んだマラグッツィ氏（レッジョ・エミリア・アプローチを幼児学校や乳児保育所に導入した人物）の功績を評価しつつ、自主的な芸術的な作品作りを通して子どもたちが創造性を大いに育んでいく様子を映し出してくれました。

3人目のパネラーは、山根耕平氏です。山根氏は、「プロジェクト・アプローチの今日的な意味」と題して、レッジョ・エミリア教育がプロジェクト・アプローチとして世界的に広がっていることを踏まえ、プロジェクト・アプローチが子どもの「主体的・対話的で深い学び」（2017年3月告示の幼稚園教育要領、小学校学習指導要領等に謳われている新しい学習形態）を主導するアクティブ・ラーニングの理念を先取りしたものであると述べ、

レッジョ・エミリア・アプローチやプロジェクト・アプローチによる教育の目標や方法の考え方が先進的であることを指摘しました。

三氏の話題提供の後、コーディネーターからの問い掛け等に応じて、3氏による議論が行われ、またフロアーとの活発なやり取りが展開されました。

当日は、兵庫県内や県外の幼児教育関係者はじめ、教育委員会関係者、大学の教育研究者など多くの方々の参加を得ました。また、本学学生や大学院生も加え、全体で250名を超える参加者があり、盛会にフォーラムを終えることができました。

なお、レッジョ・エミリア・アプローチについてもっと深く学びたいという多くの声に応え、「レッジョ・エミリア・アプローチに学ぶ～地域で支える保育と子育て支援～」と題した講演会を、本学の三宮センタープラザ教室で行いました。ここでは、パオラ・ストロツィ氏とマッシモ・ギラルディ氏に十分な時間をお取りいただき、2つの講演会という形で実施させていただきました。幼稚園や保育園の園長、幼稚園教諭、保育所保育士、認定こども園保育教諭を中心に、多くの参加者を得ました。



子どもが主体的に動く実際の映像も交えながら、レッジョ・エミリア・アプローチについて、その現在の指導者から学ぶことが出来たのは、きわめて幸いな経験でした。レッジョ・エミリア・アプローチは、世界を切り開く先進的な保育方法、保育形態であるとして、われわれは認識していましたが、パオラ・ストロツィ氏が、レッジョ・エミリア・アプローチは「哲学」であると言われたことに、少なからず衝撃を受けました。レッジョ・エミリア・アプローチは、単なる幼児教育の方法論ではなく、「子どもが実際に活動し、子どもが持つ能力を自分たちの手で駆使してこそ本当の学びが訪れる」（講演会資料より）ような、自己構築としての学びを可能にする教育であり、人間としての生き方を問い尋ねる教育であり、世界と交わることを可能にする教育であることに気づかされました。